

西安事変を契機とした国論の統一

下田 貴美子*

The Unification of Public Opinion by the Xi'an Incident

Kimiko Shimoda*

Abstract

It is said that the Xi'an Incident in 1936 was the major historical turning point that promoted the cooperation between the Nationalists and Communists. Yet many researchers have argued that the main negotiations had actually ended before the Incident; that it was not true that Chiang Kai-shek was forced to consent to cooperate by Chang Hsueh-liang during the Incident. There is an argument that even without the Xi'an Incident, the cooperation between the Nationalists and Communists would have been established. In sum, the Sian Incident was not such a dramatic historical event, as had been claimed. Yet the Xi'an Incident had another significance. When the Xi'an Incident happened, major Chinese newspapers reported it as crises of the top leader, Chiang Kai-shek and China, and condemned Chang Hsueh-liang for the rebellion. This caused a huge public reaction. The continuous criticism and protest demonstrations against Chiang Kai-shek for his non-resistance policy suddenly stopped. People who had earlier criticized Chiang Kai-shek, even people who were not usually interested in politics, began to worry about him, recognized him anew as a needed top leader and began to support him. Rallies were held everywhere supporting Chiang Kai-shek; they showed loyalty to the state and the party, and demanded Chiang Kai-shek's release. When Chiang Kai-shek was released, mass celebrations were held everywhere in China. They were more passionate than his recent 50th birthday celebrations in October, which were held to praise him as a top leader. The propaganda that came out around the Xi'an Incident unified public opinion and strengthened Chiang Kai-shek's position as a top leader. Whether it was intentional or not intentional, it became one of the most successful examples of the use of propaganda in changing public opinion.

*早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士後期課程：PhD Program, Graduate School of Asia-Pacific Studies, Waseda University
Email: k-shimoda@ruri.waseda.jp

1. はじめに

1936年12月、西安で起きた張学良と楊虎城による蒋介石監禁事件、いわゆる「西安事変」は、一般的には第二次国共合作の画期となった出来事ととらえられている。あくまでも剿共を主張する蒋介石を張学良と楊虎城は監禁し翻意を迫り、それが第二次国共合作に繋がったという説である。しかし、国共合作による抗日統一戦線の実現に関して西安事変にあまりに重点を置きすぎる傾向に対しては、既に西安事変直後から疑問が出されていた。当時の日本の外務省情報部執務参考資料(1938)は、国共合作はソ連、コミンテルンの指令によるものであるから条件がどのようなものであっても合意はなされただろうとしている。中国で長年、外交官を務めたE.クラブ(E.Clubb)(1971)は、西安事変の1年以上前からモスクワと南京は交渉をすすめており、国民党と共産党の間でも交渉が行われていたが、その中で張学良は主要な存在ではなかったとしている。V.N.ニキーフォロフ(V.N.Nikiforov)(1973)は、蒋介石は既に1935年からソ連と交渉しており、国共合作はソ連の援助取得のためであり、西安事変が起きなくても国共合作は行われていたであろうと述べている。A.S.チトフ(A.S.Titov)(1981)も同様の見解である。井上久士(1986)は、従来の研究の中で国民政府(国民党)と蒋介石が「共産党の統一戦線工作の対象」「迫られて統一戦線に応じた客体」ととらえられていることに疑問を呈し、国民党の側からの統一戦線の働きかけと意図を述べて、蒋介石の主導性に留意している。J.テイラー(J.Taylor)(2009)はソ連との関係から事態をとらえ、西安事変が起きなくても、スターリンの圧力により中国共産党は西安事変前に国民党側の陳立夫、張冲、共産党側の周恩来、潘漢年らが話し合った条件で統一戦線に合意していただろう、西安事変自体が歴史を変えたわけではないとしている。J.テイラーの説は西安事変に至るまでの中国共産党と張学良の交渉、中国共産党と国民党との交渉についての多くの研究⁽¹⁾に裏付けられている。しかし、国共統一戦線成立に果たした西安事変の役割に対する評価は変化しているにせよ、西安事変にはもう一つの意味があったのではないか。それは、国の指導者としての蒋介石の存在の確認であり、蒋介石を支持するという世論の醸成である。西安事変の報道については罗朋(2001)の論文があるが、同論文は各新聞の報道の客観性、正確性を主に扱っており、事件に対する社会の反応については言及がない。本論文では、西安事変に対する社会の反応を新聞記事により検証する。論文構成としては、1. はじめに、2. 使用する新聞、3. 西安事変勃発と新聞報道、4. 西安事変終結と蒋介石帰還報道、5. 西安事変の周辺、6. 終わりに、となる。

2. 使用する新聞

使用する新聞は、中国紙『解放日報』『中央日報』『大公報』『申報』を中心とする。『解放日報』は、中国国民党中央宣伝部発行の『西京日報』を東北軍が接収管理して西北連合軍機関紙として『解放日報』と改称した新聞で、西安事変の翌日の1936年12月13日から1937年2月10日まで西安で発行されていた(1937年3月1日、『西京日報』として復刊)。編集は中国共産党陝西省省委員会宣伝部部長の李一氓の指示により北京から来た韓進、魏文伯が担当した共産党色の強い新聞であるが⁽²⁾、前身の『西京日報』から一切の社務と債権を引き継ぎ、中華民国郵便の業務取扱及び登録配達の特許を認められ、広告欄には各企業、商店、病院、薬などの宣伝、結婚、死亡などの通知も掲載されている。同名の新聞として1941年に延安で創刊された新聞、

1949年に上海で創刊された新聞があるが、それらとは直接の関係はない。『中央日報』は国民党中央宣伝部部長が社長を兼ねていたこともある国民党宣伝部の新聞である。1927年3月に漢口で創刊され同年9月停刊し、1928年1月に上海で再刊され同年10月に停刊した後、1929年2月に再々刊された。編集方針は「国民党の意義を明らかにし、国策を宣揚する」「中央を擁護する」などであり、特に1931年の満州事変以後は、蒋介石の「安内攘外」政策支持の急先鋒として紙面を作っていた。国民党系の新聞は『中央日報』の他に『掃蕩報』『時事新報』などがあったが、1930年代から40年代にかけての『中央日報』は陳果夫、陳立夫兄弟を中心とした党派であるCC系の新聞と言われていた⁽³⁾。陳立夫は当時、軍事委員会調査統計局局長で諜報・特務活動を行っており、蒋介石の命令でソ連との交渉、中国共産党との交渉に当たっていた。新聞には陳立夫の意向が大きく反映されていると考えられる。『大公報』は1926年9月に呉鼎昌、胡政之、張季鸞によって創刊された。同名の新聞が1902年に創刊されているが、名称を買収して冠しただけで実質的な継承関係はない。以前の『大公報』と区別する意味で、会社名「新記公司」を冠して「新記『大公報』」⁽⁴⁾と呼ばれることもある。1926年9月創刊当時の方針は「不党（特定の政党と関係しない）、不買（金銭的に買収されない）、不私（私的にならない）、不盲（無知にならない）」の「四不」であったが、1931年の満州事変以後、国家を擁護し、民族の自由を守るために強力な指導者の下に国民が団結する「国家中心論」に傾斜していく。強力な指導者として『大公報』が主張したのが蒋介石の存在であった⁽⁵⁾。『申報』は1872年4月にイギリス人の貿易商メジャー（E.Major）によって創刊され、『申江新報』がもともとの紙名である。メジャーの帰国後、別の外国人経営者を経て、1912年史量才が経営権を引き継ぎ、内容も充実させ部数を伸ばし、大新聞となった。申報社は新聞だけでなく多くの雑誌も発行していた。1931年の満州事変以後、『申報』は抗日、民主を主張し、国民党の不抵抗政策と一党専制を批判し、『大公報』とはまったく逆の方向を取った。1934年11月、史量才は国民党の特務によって暗殺され、史量才の子である史泳賡が経営を引き継いだ。以後、保守化したと言われた。

3. 西安事変の勃発と新聞報道

西安事変が起きたのは1936年12月12日であるが、蒋介石は既に10月22日に南京から飛行機で、錢大鈞をはじめとする軍事委員会委員長侍従室の武官、文官ら20人ほどと共に西安に到着し、張学良、楊虎城、邵力子などの出迎えを受けている。10月22日の洛陽到着から12月12日の西安事変の発生まで、蒋介石は10月24日～26日の華山見学、11月12日の嵩山見学、11月17日～18日の太原訪問、11月19日の済南への日帰り訪問を除けば、ほぼ洛陽と西安に留まり続け、南京には戻っていない。当時、軍事委員会委員長、行政院長などの役職を兼ね、事実上、軍事、政治を統括する最高権力者であった蒋介石のこれほど長い南京不在は不自然とも思われるが、蒋介石は南京にいるよりは他の地方にいることが多かった。前年の1935年も南京にいたのは通算して4カ月弱であり、1936年も1ヶ月弱の廬山滞在を除いても、漢口、重慶、昆明、貴陽、長沙に合わせて1ヶ月、広州に1ヶ月滞在している。こうした地方滞在は主に地方領袖との話し合いや軍事訓練のためであり、地方の中央政府へ統一化の一環であった。洛陽にいた蒋介石が西安に移ったのは12月4日である。この時点で西安には、10月に西安に来た侍従室のメンバーの他に、朱紹良、陳繼承、陳誠、邵力子、蔣鼎文、陳調元、衛立煌などの西北地区の剿共を

担う蒋介石直系の高級軍人が集まっていた。既に10月に蒋介石が西安に来た際に、蒋介石の西安・洛陽滞在は西北の剿共の実情視察と指導であるとか⁽⁶⁾、剿共の実情視察と指導というのは表面上の理由であり、実際は日本に侵略された華北に対する政策協議と張学良系の旧東北軍と馮玉祥系の軍隊の改編と西北の中央化である⁽⁷⁾などと報ぜられていたが、これだけの高級軍人がそろった時点で剿共や軍隊の改編といった具体的な協議がいつでもできる状態になっていた。そこで勃発したのが12月12日の西安事変である。

西安事変の勃発に対して、国民政府は同日の12月12日に中央執行委員会常務委員会28回会議（臨時会）を行ない、張学良の職務を剥奪し、張学良の指揮していた軍は軍事委員会の直接指揮下に置くことを決議した。12月13日付の『解放日報』は「張・楊は時局に対する宣言を発表、8項目主張の全国受け入れを要求、蔣委員長は兵諫保護の状態、ただし、安全問題は心配なし」⁽⁸⁾という見出しの下に、張学良と楊虎城による中央執行委員会、国民政府主席、各院部、各綏靖主任、各総司令、各省主席、各救国連合会、各機関、各団体、各新聞社、各学校あての通電を掲載している。8項目の要求は、①南京政府を改組し、各党各派を受け入れ、共同して救国の責務を負うようにせよ、②一切の内戦を停止せよ、③上海で逮捕された愛国指導者達を即時釈放せよ、④全国のすべての政治犯を釈放せよ、⑤民衆の愛国運動を（制限することなく）解放せよ、⑥人民の集会・結社・一切の政治的自由を保障せよ、⑦総理の遺囑を確実に実行せよ、⑧救国会議を即時に開催せよ、である。呼びかけ人として、張学良、楊虎城、朱紹良、馬占山、于学忠、陳誠、邵力子、蔣鼎文、陳調元、衛立煌、錢大鈞、何柱国、馮欽哉、孫蔚如、陳繼承、王以哲、萬輝煌、董英斌、繆澂流が名を連ねている。13日の紙面を見る限りでは張学良、楊虎城が蒋介石側近の高級軍人と共に蒋介石の方針変更を迫っている印象がある⁽⁹⁾。12月13日の『中央日報』『大公報』『申報』⁽¹⁰⁾の見出しは前述の政府の決定を伝えるとともに、張学良の動きを伝えているが『中央日報』『大公報』の見出しは「張学良、兵を率いて叛変」としている。『申報』の見出しは「西安で、昨日、重大な事変が発生した、張学良の統率する部隊が突然移動」となっており、「叛変」という言葉は使っていない。しかし、本文では、3紙とも「張学良が兵を率いて叛変」「政府を覆すことを主張」「通電において蔣委員長に対して最終的諫言を行なっており、しばらく西安に留める、などと明言している」と報じている。これは南京の中央通信社の配信したニュースによるものである。「最終的諫言」は張学良と楊虎城の通電の8項目であるが、内容は明らかにされていない。

12月13日の『中央日報』の社説「昨日の西安の叛変」⁽¹¹⁾と題する社説⁽¹²⁾は、西安は昨日から電報が不通であるが、各所の報告から叛変は確実であるとして、張学良の過去⁽¹³⁾は今更言う必要はないが、現在、剿共の責任を負いながらこのような事件を起こしたことを批判している。『中央日報』社説の張学良批判は12月14日も続き、14日の「時局の定力」⁽¹⁴⁾と題する社説は、張学良を乱臣賊子に例え、その行動は匪盗、その意図するところは騒乱であり、匪盗の集団には政治主張も政治目的もないと決めつけて批判している。『大公報』『申報』が社説で西安事変を取り上げたのは12月14日である。12月13日の『大公報』の社説は「民族の自信の復興」と題された、百霊廟の戦い⁽¹⁵⁾での中国の勝利についてで、この戦いが民族の自信を取り戻す始まりとなっていると論じたもので、西安事変についてはない。『申報』には12月13日の社説はない。『大公報』の12月14日社説は「西安事変の善後」⁽¹⁶⁾という題で、中国統一の指導者としての蔣

介石の実績と重要さを説き、張学良の行った行動を批判し、これはスペインのような内戦⁽¹⁷⁾を引き起こし国家の危機を招く行動であるとしている。その上で、蒋介石の解放を求めるとともに、軍事的手段を用いることなく調停する必要を説き、各省・各界が団結して大局を維持することを呼びかけている。『申報』社説「中国はまだきちんとした中国である」⁽¹⁸⁾は、中国が統一された国家であり、西安事変は国の統一を崩すような重大な事件であるとし、『大公報』社説と同じく同様に蒋介石の軍事指導者としての実績と重要性を説き、蒋介石の自由回復、全国の団結を呼びかけている。

12月14日以降の各紙は、中央が各省、各機関の責任者に人々の動揺を防ぎ、治安の維持を呼びかけており、各地の政治、軍事の長官が一致してそれに従っていることを報じている。また各責任者の張学良批判、中央擁護の電報を紹介している⁽¹⁹⁾。例えば、広州綏靖主任兼第4路軍司令である余漢謀は黄慕松と連名で中央に「擁護中央、維持地方治安」の打電し、記者に対して、今、国難の厳しい時期、全国の軍政統一が先決であり、張学良が政府を覆そうとし、最高領袖を脅かしているのはよくないと語ったと報ぜられている。また、青島市長の沈鴻烈は、国難の際に、このような叛国激変に遭遇するとは怒りを覚える、中央の訓示に従う、地方の治安を維持する、と孔祥熙に打電している⁽²⁰⁾。中央に対してやや距離を置いていると思われていた李宗仁、白崇禧、黄旭初も、ここ数年の蒋介石の努力を讃え、張学良を非難し国の安定を願う旨を孔祥熙に打電している⁽²¹⁾。また、四川省主席の劉湘も西安事変に対して怒りを示し、中央の命令に従う、張学良討伐命令を出すようにと他の32人とともに打電している⁽²²⁾。また、張学良に対して、翻意を促す打電も大量になされていると報道されている。12月14日には、軍事委員会副委員長・馮玉祥⁽²³⁾が打電、12月15日には第1軍軍長兼第1師師長・胡宗南が軍学校卒業生275人⁽²⁴⁾とともに5万人の卒業生を代表して打電⁽²⁵⁾、冀察政務委員会委員長の宋哲元も他の約40人とともに打電している⁽²⁶⁾。こうした打電の様子が『中央日報』『大公報』『申報』3紙の紙面を埋めている。しかし、これらの打電がどの程度、信頼性がおけるものかは不明である。12月14日の『解放日報』には、上述の李宗仁、白崇禧、四川省主席の劉湘、冀察綏靖公署主任の宋哲元が代表達を西安に派遣してきており、代表達は無事到着したとの報道がある⁽²⁷⁾。また、張学良が抗日連軍臨時西北軍事委員会を立ち上げたことに対して千数百件の賛同電報が来たとしている⁽²⁸⁾。西安の張学良の下に電報が殺到したのは事実であろうが、内容について賛同電報としているのは『中央日報』『大公報』『申報』では皆無である。3紙の12月15日の紙面では、張学良討伐要請の記事が紙面を埋めた。まず、軍事関係者からの声が挙げられ⁽²⁹⁾、戦う準備はできているという報道がなされている⁽³⁰⁾。また、各地のさまざまな団体が中央に張学良討伐要請電報を送っていることが報道されている⁽³¹⁾。12月16日になると、軍事関係者が中央に討伐要請電報を打っていることが報道された⁽³²⁾。

張学良討伐の世論が高まる中で、12月16日午前9時に開催された中央執行委員会政治委員会第30回会議で張学良の討伐が決議され、何応欽が討逆総司令に任命された。この決議の附記には「以後の一切の宣伝は、すべてこの案の決議に沿わねばならないものとし、少しでも相違するもの、個人の言論がこの決議に沿っていないものは発表できない、中央宣伝部、中央新聞検査処が調べて処理する」⁽³³⁾旨が述べられている。西安事変について厳しい言論統制がなされたのである。12月17日の各紙はこの討伐令の報道がトップ記事となった⁽³⁴⁾。『中央日報』は前日の中央

執行委員会政治委員会第30回会議の決議、国民政府の討伐令、監察院の張学良の弾劾、討逆総司令・何応欽の討伐指令が最上段に報道されている。『大公報』は決議に加えて、既に陝西の華県で戦闘が始まっている報道が最上段である。『申報』は今までの経過と中央政治委員政治委員会第30回会議、現在の西安の蒋介石の状況を伝えている。『申報』には「張逆学良」という言葉を使用しているところもある。各紙の17日の社説で最も張学良に批判的なのは『中央日報』の「謀反人を討つ—我々の十字軍」と題されたもので、昨日の会議について述べた後、「西安の賊の首領である張学良は人さらいであり、野盗である。先祖が馬賊なら、子孫も馬賊だ、現在、西安で行われている手口は人さらい馬賊のやり方で、いかなる行動もいかなる主張もすべて賊の心と賊の見方による匪賊盗賊の行為であり、我々は今回の叛逆事件をあくまでも認めることはなかった⁽³⁵⁾」として、国民は皆、蔣委員長の安否を気遣っており、小学生も食事が喉を通らず涙を流し、人力車夫も「機会があったら張学良を叩き殺すのに」と言っている、西安討伐は中国復興の重要な分かれ目であり、この戦いは神聖な戦争であり、討伐兵士も神聖な兵士であり、まさに中国近代史上の十字軍であるとしている。『大公報』の社説「討伐令が下された後」⁽³⁶⁾も張学良のやり方を批判しているが、それ以上に国の指導者としての蒋介石の存在の重要性を説き、張学良の翻意を促している。『申報』の「国民政府、張学良討伐を命令」も同様である。紙面の他の頁は各紙とも、事変以来続いている全国各地の政治・軍事関係者、党部、学校関係、商・工・農会、市民団体、宗教団体などの反応についての記事を掲載しているが、いずれも、政府支持、張学良糾弾、張学良討伐要請、蒋介石解放要請である。この動きは社会のあらゆる集団を巻き込んだ。宗教者も例外ではない。キリスト教徒は西安事変発生後すぐに南京教区司教・于斌の下で蒋介石の安全のために祈祷を捧げ、他の教会にも祈りをささげるように求めている⁽³⁷⁾。回教徒団体は張学良に悔い改めを求め、さもないと西北の回教徒は皆あなたを敵とみなすと張学良に打電し⁽³⁸⁾、蒋介石のために祈りを捧げている⁽³⁹⁾。また、山東省の回教徒である趙明遠ら5人は同じ回教徒である白崇禧に蒋介石救出協力を打電している⁽⁴⁰⁾。パンチェン・ラマ9世は蒋介石のために壇を設けて読経し、張学良に一時の感情から国を誤らないように、改心して蒋介石を南京に戻すようにと忠告電報を打っている⁽⁴¹⁾。雍和宮を管理しているチベット仏教のチャンキャ・ホトクトも大規模な祈祷をささげている⁽⁴²⁾。学校関係では大学、中等学校以上の教職員、生徒だけの打電ではなく、童子軍（ボーイスカウト団体）も、以前、張学良が少年達に向かって話した話と現在の行動が違っていると張学良に打電している⁽⁴³⁾。海外の華僑、駐外国中国大使から電報が寄せられている⁽⁴⁴⁾。記事中で張学良は「張逆」と表記されるようになった。さらに12月16日に討伐令が出たことで、別の動きも出て来た。軍人が自分を早く討伐の場へ送って欲しいと中央に決意を示すのは当然とも言えようが、一般人が自ら隊を結成して西安に赴こうという動きである。紹興では18日に党部が会議を開き、蒋介石救出を論議し、代表7人を選出して西安に送ることにした⁽⁴⁵⁾。南京でも19日に、中央軍に従って西安に行く「赴難団」結成の協議が行われた⁽⁴⁶⁾。この動きは各地に波及し、安徽省の安慶市では各学校の学生が集まり、それぞれの学校で代表を選んで隊を結成することを決定した。南京の童子軍も同様の決定をしていた⁽⁴⁷⁾。南京の童子軍はさらに21日に会議を開き、「京市童子軍營救会長⁽⁴⁸⁾ 討逆服務団」と組織名を決め16歳以上、体格健全、家長の許可を得たものを団員として発表し、すぐに出発するとしている。雲南省では60歳以上の老人200余人が西安に赴くための車両を出すように省政府に求めたが、省政府は

年齢が高いこと、昆明と西安の遠距離を理由に婉曲に阻止を行なった、また同じく雲南では中等学校以上の学生4千余人が戦うために同様の請求を行っていると報道されている⁽⁴⁹⁾。同様の隊結成の動きは、漢口、福州、徐州、上海などでも起きている⁽⁵⁰⁾。12月25日の『中央日報』紙面には、徐州、鄭州、蕪湖からの「赴難団」が既に西安に向かっていると報じている⁽⁵¹⁾。西安に赴くことはできないが、南京では21日に各機関団体、学校で、張学良討伐を支持し、国家、党、蒋介石委員長に忠誠を誓う百万人がそれぞれの場で宣誓式行うという報道もなされた。参加者は右手を挙げて「党と国に忠誠を尽くし、三民主義を実行し、蔣委員長を擁護し、領袖が安全に自らの職権を行使して、侮りを防ぎ救国民族復興の大業全国的完成を領導し継続をすることを願う」と誓うのである⁽⁵²⁾。同様の会は陸軍大学でも行われた⁽⁵³⁾。また、12月25日の紙面にも各地の討逆大会でも同様の宣誓が行われたことを報じている⁽⁵⁴⁾。討逆大会の最後に忠誠宣誓を行うのは新たな形式となった。社会全体として、蒋介石拘束について訴える環境が作られていった。例えば、中央ラジオ局は、西安事変以後、番組変更を行ない、西安事変関係のニュースをできるだけ流すとともに、音楽は愛国歌曲を流すようになった⁽⁵⁵⁾。また、蒋介石西安拘束により南京各界は12月21日に行われた討逆記念週の際に翌日の12月22日から娯楽宴会3日間停止を決議した⁽⁵⁶⁾。南京市の社会局は所属下の各機関、学校、劇場、飲食店、旅館などに当面の娯楽宴会、ダンス、などの停止を通告した。この通告により劇場同業会は12月22日から3日の営業停止を決めた。各劇場は共同して広告欄一面に営業停止広告を出した。しかし、南京では12月21日の決議以前にも、憲兵隊司令部が戒厳期間であるから開催が認められないとして停止勧告をした行事もある⁽⁵⁷⁾。無条件に許されるのは討逆大会だけである。

こうした状況の中で蒋介石の重要性の認識は飛躍的に高まった。思想家として強い影響力を持っていた胡適は12月21日、『大公報』に「張学良の叛国」と題した週間論文を発表し、この変化に言及している。胡適は西安事変が起きてから様々な人に会ったが、老若を問わず、また日頃、蒋介石を支持しているか批判しているかを問わず、「今や皆、等しく蔣先生の安全に関心を持ち、信頼できる情報を得るために一生懸命である。すべての意見の違いは頭から抜け落ち、ただ皆、この能力と手段を持つ指導者の身に国家の安全が結びついていると感じている」と述べ、また、西安事変に関連して、12月13日の早朝、北京大学のある学生が精神異常状態になったり、知人の11歳か12歳の子2人が急に大声をあげて泣き出したことをあげて、「この現象はこの英雄不崇拜の民族において本当に得難い奇跡である。このような強い愛護の気持ちは宣伝で作られたものでも、武力や権威によってもたらされたものではない」とし、人々がここ数年の蒋介石の努力を明確に認めた結果であるとしている⁽⁵⁸⁾。西安事変により、社会全体が蒋介石と中国の運命について認識させられたという状態が形成された。西安事変報道では報道規制により張学良と楊虎城の要求は明らかにされず、ただ政府を覆すことを主張して蒋介石を拘留しているということになっている。張学良と楊虎城の要求をめぐる議論は起こらず、彼らは一方的な非難的になった。

4. 西安事変終結と蒋介石の帰還

こうした中で12月25日、蒋介石が解放されたことで、12月26日の紙面は一変する。『解放日報』は「精誠は金石も切り開く、蔣委員長、救国の主張を受け入れる」⁽⁵⁹⁾との見出しで、蔣委員

長は西安に留まって以後、謙虚に張・楊將軍の意見を聞き要求した8項目をすべて受け入れた、張副指令は蔣委員長長のこの精神と態度に非常に敬服し、昨日（25日）午後4時、蔣委員長とともに飛行機で洛陽に向かった、同行者は蔣夫人、宋子文、顧問のドナルド（Donald, W.H.）などである、と書いている。しかし、この8項目受け入れ報道は各機関に通電されたが、報道規制により報道されることはなかった。『中央日報』の見出しは「蔣委員長昨日洛陽に到着、全国はこのニュースに大きな歓声、爆竹と歓喜の声は一晩中絶えず」、『大公報』は「蔣委員長危険を脱し洛陽到着、全国の民衆は狂喜、蔣委員長昨日洛陽に留まり今日帰京、張学良洛陽に随行到着、近く外国へとも、陝西問題処理は数日中に明らかに」、『申報』は「蔣委員長、昨日無事洛陽に戻る、宋子文、宋美齡などと共に飛行機で洛陽着、本日早朝、洛陽から飛行機で帰京し大計主事とのこと、前線各軍はすでに命令に従い休戦し前進を停止」となっている。記事についても3紙とも蔣介石無事解放とそれを喜ぶ民衆という構成である。『解放日報』にあるような条件受け入れについての言及はない。わずかに『申報』が25日のロイター電として「今晚、当局が発表したところによると、蔣委員長はすでに自由を回復している、それについてはまったく条件は付いていない、蔣委員長が危険を脱したあとまず行なったのは停戦命令である」⁽⁶⁰⁾と報じているだけである。『中央日報』は蔣介石が迅速に危機から逃れることができた要因として、①蔣委員長の偉大なる人格の感化、②全国の民意の力量、③中央の迅速派遣措置、④武装同志の毅然とした赤誠忠勇表示、を挙げている⁽⁶¹⁾。

『中央日報』の社説「狂喜の中の幾つかの話」⁽⁶²⁾では蔣委員長が西安から無事洛陽に到着したというニュースが伝わった午後6時から本日早朝に至るまで全国は狂喜し、爆竹が鳴り、号外が飛び交っている、過去13日間の陰鬱さと義憤がこの喜びに変わったと述べ、事実確認の問い合わせがひっきりなしに新聞社に来る、人力車夫が腕をあげて激しく叫んでいるなど、これらすべてが人々の国家を思う気持ちの現れであるとしている、蔣委員長はすでに全民族の領袖であったが、今回の蒙難はさらに全国民の民意を確かめることになった、国民は1日たりともこの領袖と離れることはできないということが証明された、この13日間に国家と領袖は一体となったのであると述べている。さらに、この13日間に党と殉じる気持ちを新たにしたり、領袖の健康を祈り、喜びの中で領袖の帰京を歓迎すると結んでいる。しかし、張学良については最大限の侮蔑的な言葉「梟獍豺狼」（親の恩を忘れて親を食い殺すような梟、残忍な山犬や狼）で表現し、その行動は許せないとしている。『中央日報』の張学良に対する批判は13日の社説での「乱臣賊子」「匪盗」表現以来一貫しており、「張学『良（lang）』を張学『狼（lang）』と改称すべき」⁽⁶³⁾などの記事に見られるように必要以上に貶めている観がある。これは「有能かつ人格高潔な領袖である」蔣介石をより輝かせる効果となっているとも言える。『申報』の社説「蔣委員長、陝西（西安）を離れ、洛陽到着」も、「このニュースを得て本誌はただちに号外を発行し。全市に撒いた」から始まり、人々が歓喜する様子を述べ、この間の人々の憂いが喜びに変わった、人々は解放を待ち望んでいた、蔣委員長が帰京し政務を主持することは国民が望んでいるとしている。ただ、『申報』は「蔣氏が西安を離れた経過についてはまだ詳しい情報は明らかになっていないが民意の助けによるものであろう」と、述べ、あくまで「民意」としつつも経過について留意している。『大公報』の社説「国民の良知の大勝利」は、西安事変の凶を吉に変えたのは国民の愛国の良知であったとする。西安事変に参加した人々は軍紀を犯したが、彼らには良知がありそれが解

決の基礎となった、そして国民は統一独立のために努力している蒋介石氏を支持し、分裂騒乱を望まなかった、これにより今回の事件は解決した、これにより、全世界に中国は統一された国民であり、全国を領導する領袖を持っていることを知らしめた、我々は自らの愛国と国を守る自信を強め、精神的にも事實的にも団結が強まった、中国の建設は新しい段階になったというものである。『大公報』は張学良、楊虎城の良知を評価している。『大公報』は12月13日の社説でも述べたように、内乱を起こすべきではないという意見で一貫していた。12月23日の社説は「中国はスペインになってはならない」⁽⁶⁴⁾と題して、分裂を防ぐという大原則の下に努力をすべきで、政府の適切な処置と反乱者に反省を求めている。『大公報』は、『中央日報』と異なり、一方的な張学良非難は行っていないのが特徴である。以下、12月26日の『中央日報』『大公報』『申報』の3紙の紙面を埋めたのは蒋介石解放に喜ぶ全国各地の様子であった。『大公報』には12月25日の南京、上海、綏遠など23都市の様子が掲載されている。その様子を、総合すると、各新聞社は皆、号外を出した、各機関は「蔣委員長西安から洛陽着」の横断幕を挙げた車を走らせ、ピラをまいた。夜になったが、繁華街は車と人でひしめき合い、まるで元宵節のような賑わいである、各機関や学校はトラックを臨時に雇ってデモを行った、「蔣委員長万歳、中華民国万歳」と高唱する声があたりに響きわたり、爆竹の音が止むことはなかった、酒場には歌声が溢れた、市全体が狂喜し、空前の盛況であった⁽⁶⁵⁾という報道である。12月26日もこの興奮は続いていた。12月27日に報道された26日の様子は、前の晩は一晩中爆竹と歓呼の音が止むことはなかった、午前中は慶祝大会、会後はデモ、午後は遊芸大会、夜は提灯会、学校では旗を掲揚の際に、学生が「蔣委員長万歳」「中華民国万歳」などのスローガンを叫んだ、午後は休暇、一日中、爆竹の音が続いたというのが各地のだいたいのパターンである⁽⁶⁶⁾。

12月27日の新聞は、26日正午12時に蒋介石が南京に戻って来た時の様子を伝えている。空港の周りには蒋介石帰京歓迎のため、国旗や楽器を持った学生、市の党员、農工商民衆団体代表、文化団体、軍警憲官兵など40余万人⁽⁶⁷⁾が集まり、空港を4周するほどで付近の道路が塞がれることになった、空港には政府各機関の要人2千余人が集まった、蒋介石は空港を出ると車で市内を回ったが、商店や家々にはすべて旗が掲げられ、銅鑼を鳴らし、人々は喜びの声をあげて車内の委員長を争って見つめた、委員長の車はゆっくりと走り、委員長は手をあげて人々に応えた⁽⁶⁸⁾、というものである。商店では委員長が無事帰京を祝してバーゲン・セールを新聞に掲載した。バーゲンばかりでなく、記念ハンカチを贈呈という店もあった⁽⁶⁹⁾。営業を一時停止した劇場、映画館は営業を再開し、映画に加えて「蔣委員長危機を脱し帰京」というニュース映画を上映するとしている⁽⁷⁰⁾。また、酒場、レストラン、ダンスホールの営業が再開されたのは言うまでもない。

南京では12月27日午前8時から中央党部、国民政府五院（行政院、立法院、司法院、考試院、監察院）各部による合同蔣副主席帰京大会が中央党部大礼堂で開かれた。党部から90余人、各院から1千余人が参加した。その際には「中華民国万歳」「中華国民党万歳」「蔣副主席万歳」などのスローガンが高唱された。林森主席は、蒋介石が無事帰京できた喜びを述べ、西安事変解決後に得た教訓として、「国家がどのような危難に遭遇しようとも、ただ国民が心を一つにして、中央に従い、領袖を支持すれば一切の危難はすべてきれいに解決できると深く悟った。以後は蔣委員長の領導の下で、努力猛進しよう」⁽⁷¹⁾と述べた。同じく、12月27日8時半から、南

京各界による蔣委員長帰京慶祝大会が、明故宮飛行場で開かれた。大会後のデモ・ルート、飛行機からのピラの配布、大会での高唱スローガンなどはあらかじめ新聞に掲載されていた⁽⁷²⁾。スローガンは、「①蔣委員長は中華民族の救いの星だ、②蔣委員長支持、③蔣委員長万歳、④中華国民党万歳、⑤中華民国万歳」である。20万人余りが参加し、参加団体毎に「慶祝蔣委員長帰京」の布の垂幕を持ち、また、それぞれの参加者は「慶祝蔣委員長帰京」「蔣委員長万歳」などと書かれた旗を手にしていて、参加者は会場でもスローガンを唱え、またデモ行進でも同様のスローガンを高唱した⁽⁷³⁾。馬超俊南京市長が帰京歓迎の辞を述べた。会に出席していなかった蔣介石に代わって軍政部長の何応欽がお礼の言葉を述べた。この光景は2ヶ月前の再現とも言えるものだった。同じ明故宮飛行場で1936年10月31日、20万余人が集まって、蔣介石閣下の50歳の誕生日を祝う飛行機献納式典が行われたのである。そして、同じように横断幕や小旗を持った人々が集まり、ほぼ同じような式次第で蔣介石の誕生日を祝った。その時にお祝いの言葉を述べたのは林森主席だったが、洛陽にいた蔣介石に代わってお礼の言葉を述べたのは同じく何応欽軍政部長だった。10月31日の飛行機献納式典は半年近く行われた飛行機献納運動の結果だった。以前から、飛行機献納は行われていたが、1936年の蔣介石の50歳の誕生日祝いと結びついた飛行機献納運動は、強制寄付も含めて全国を巻き込んだものだった。各地で誕生日慶祝大会が開かれ、慶祝デモが行われ、提灯会、遊芸大会が行われ、ピラがまかれ、爆竹がたかれた。中央には誕生日を祝う電報が山のように届いた。西安事変の後の蔣介石帰京慶祝大会とまったく同じ光景である。各地の誕生日慶祝大会や慶祝デモでは「蔣委員長は総理の忠実な信徒である」「蔣委員長は中国国民党の唯一の領袖である」「蔣委員長は中華民族の救いの星である」「蔣委員長万歳」「三民主義万歳」「中華民族万歳」「中華国民党万歳」といったスローガンを唱えることが指示された⁽⁷⁴⁾。軍閥が争い民衆が苦しんでいるのを救えるのは蔣閣下だけ、強敵侵略の国難を救えるのは蔣閣下だけと蔣介石の素晴らしさが強調され、「総理の信徒」「同胞の救いの星」「天性の偉人」「東亜の聖人」「東亜の救いの星」である蔣閣下を讃える歌⁽⁷⁵⁾も作られ、各会場で歌うように指示された。新聞は飛行機献納、蔣介石50歳誕生日祝賀関連の記事で埋め尽くされた。蔣介石50歳誕生日祝賀宣伝活動は、国民党中央執行委員会宣伝部と蔣公寿辰献機記念委員会によって行われたが、西安事変後の祝賀は、あくまでの自然発生的に起きたという形だった。しかし、やり方は前回をほぼ踏襲している。しかも、西安事変後に行われた各地での蔣委員長帰京慶祝大会は50歳誕生日祝いよりもさらに多くの人々を巻き込み、より大規模な形で行われた。50歳誕生日祝いに唱えられたスローガンがあらゆる場所で繰り返され、焚かれた爆竹の量は道路に積もって車の通行が阻まれてしまうほどだった⁽⁷⁶⁾。西安事変の際に中央に電報が大量に来たように、解放の際もまた喜びの電報が大量に届いた。新聞ではその電報についても紹介している。蔣介石無事帰還は、50歳誕生日祝い以上に祝われ、お祭り騒ぎとなり、蔣介石の重要性を人々に認識させる結果となった。新聞がその中で果たした役割は大きい。

5. 西安事変の周辺

西安事変を引き起こすことになった10月の蔣介石の洛陽・西安行きについては、中国共産党との話し合いを目的としたものではないかという噂がささやかれていた。駐中国アメリカ大使館参事官ペック (G.Peck) は本国への1936年10月23日の報告で、信頼できる筋からの情報とし

て、「目的は匪賊討伐の検証であると新聞は報じているが、日本と戦うために共産党指導者の朱徳と毛沢東が国民政府に従うことを再度申し出ている、蒋介石は共産軍を中国軍に含めるための条件を協議しようとしているという噂がある」⁽⁷⁷⁾と述べている。この噂を確認するために、ペックは軍政部長（何応欽）にも訊くが、軍政部長は旅行の目的は本当に匪賊制圧のためで、西北の共産主義者の大半がたまたま集まるのに出くわしただけだ、共産主義者が国民政府の指揮の下に日本と戦うとか、共産主義者と平和的取り決めを行なうという考えは馬鹿らしいと述べていた⁽⁷⁸⁾。蒋介石の西安・洛陽滞在は西北の剿共の実情視察と指導である、いや実際は日本に侵略された華北に対する政策協議と張学良系の旧東北軍と馮玉祥系の軍隊の改編と西北の中央化であるというのは報道されていたが、10月31日の「上海日日新聞」は、西安で会議が開かれ、剿共兵力を国防兵力に振り向けるため、共産軍との一時的妥協を含む諸問題が討議されたとしている⁽⁷⁹⁾。11月7日付の「チャイナ・ウィークリー・レビュー（China Weekly Review）」は、「蒋介石はソビエトの代表者達と会ったか？」⁽⁸⁰⁾との見出しの記事は上海日日の天津発の記事としているが、ソ連と中国の間には秘密の軍事協定が3月に締結されたと言われており、その内容は、西北は紅軍の基地として認められ中央政府は剿共を停止する、紅軍は蒋介石の指揮下の国軍になる、ソ連と中国は一致して抗日戦を戦う、などで、その秘密協定に加えて詳細をつめるために蒋介石はソビエトの代表者達と西安で話したのではないかとほめかされていたとある。

1957年に出版された蒋介石の『蘇俄在中國（中国の中のソ連）』には、交渉は1936年5月5日の共産党の「停戦講和」通電以来、共産党側から周恩来と潘漢年、国民党からは陳立夫が交渉し、四項目の原則、すなわち①三民主義を遵奉すること、②蔣委員長の指揮に従うこと、③「紅軍」を解消し、国軍に改編すること、④ソビエト地区を解消し地方政府に改めること、を国民政府から中国共産党に提示した、そして、「長い交渉を経て、最後に彼らはこの4項目の原則を受け入れ、一切の条件もだいたい合意に至ったので、ただ、私が南京に戻って最終的な審査・指示を行うのを待つだけになっていた」⁽⁸¹⁾と書かれている。また、陳立夫も回想記『成敗之鑑』において、西安事変の前には既に共産党が四項目の原則を受け入れていたことを述べている⁽⁸²⁾。蒋介石と陳立夫の上述の言及は、ソ連人民外交部次長ストモニャコフ（B.S.Stomoniakov）の駐中国ソ連大使ボゴモロフ（D.V.Bogomolov）宛ての1936年10月23日付の手紙で確認できる。この時期、中国とソ連の間では1935年10月に蒋介石が提案した秘密軍事協定提案⁽⁸³⁾から始まった協議が続けられていた。この協議は中国側の条件がはっきりしないために、ソ連が難色を示してまとまらないままに継続交渉となっていたものである。この交渉のさらなる話し合いのやり方について、ストモニャコフはボゴモロフに、中国側から、中日交渉、中国紅軍との交渉、中国政府の全般的計画についてより精緻な情報を得るように指示するとともに、我々が「中国政府と中国紅軍の間で中国紅軍が南京の權威と政權を認めるという基本に立って」⁽⁸⁴⁾中国の保全のための合同の戦いについて両者の合意に関する交渉が行われていることを陳立夫から聞いて非常に嬉しいと思っている⁽⁸⁵⁾と蒋介石に告げてもいいかもしれないと述べている。蒋介石の指示を受けた陳立夫は1935年12月にボゴモロフに中国とソ連の連合を打診した際⁽⁸⁶⁾に、中央政府と中国共産党・紅軍との関係是正につきソ連の協力を求めたが、ボゴモロフに「中国政府と中国共産党の問題は中国国内の問題であり、ソ連政府は他の国の国内問題には介入しないのが対外政策の基本」と言われている。以後、陳立夫は、主にボゴモロフを通じてソ連と交渉し、かつ、「国内間

題」とされた中国政府と中国共産党の関係を調整するために、中国共産党・紅軍との交渉を重ねていた⁽⁸⁷⁾。

既に、1934年11月の時点で駐中国ソ連大使ボゴモロフは人民外交部あての報告で、満州に続いて華北諸省が日本の手に落ちた場合、蒋介石は「政治の舞台から去るか、日本への抵抗を組織するか以外の選択肢はない」⁽⁸⁸⁾と予測していたが、この予測は現実化した。蒋介石は日本の華北、内モンゴル侵略によって軍事、政治指導者としての地位を脅かされ、ソ連は、満州国建国にとどまることなく以後も続く日本の華北、内モンゴル侵略によって自国と外モンゴルが脅かされることを懸念していた。両者の利害は一致するところとなっていた。ソ連がさらに恐れていたのはヨーロッパにおけるドイツと極東における日本によってソ連が挟撃されることだった。ソ連はコミンテルンを使って、ファシズム、帝国主義を戦う人民戦線を提起した。中国においては蒋介石と組んでの反日統一戦線の結成である。コミンテルンの一員である中国共産党はこのコミンテルンの方針に従い「反蔣」から「逼蔣」「連蔣」へと方針を変えていた。蒋介石の提起した4項目の原則の受入による合意形成がなされたゆえんである。張学良は1935年末の時点では、既に紅軍への戦闘をほとんど停止していた。張学良は同年11月の国民党4期6中全会に出席するために南京に来ていたが、11月19日にソ連大使のボゴモロフと接触している⁽⁸⁹⁾。11月28日に共産党の李杜と応徳田⁽⁹⁰⁾がボゴモロフに、自分達のグループの抗日の意を伝えてしている⁽⁹¹⁾。応徳田は12月13日にも、休暇で帰国したボゴモロフに代わってソ連大使館のオシャニンに接触し、ソ連との直接連繫の可能性を打診している⁽⁹²⁾。張学良は中国共産党とも1936年1月19日に洛川で中国共産党中央連絡局長・李克農と会談し、2月25日には、自身が南京に行く用事のために67軍軍長・王以哲に指示し、再度、李克農と話し合わせ、自身は南京から戻った翌日の3月4日に李克農と話している。以後、4月9日の周恩来、李克農、張学良の延安会談から始まって、張学良にとって1936年は中国共産党と戦うことより、話し合うことに費やされていた観がある。

この張学良と中国共産党との接触を南京方面ではある程度わかっていた⁽⁹³⁾。中央執行委員会中央検査新聞処処長の賀衷寒は1936年9月18日付電で、張学良がソ連と連絡を取っていることを蒋介石に知らせ⁽⁹⁴⁾、1936年2月に山西・綏遠・陝西・甘肅四省剿匪総指揮に任命されていた陳誠は9月20日、21日、24日に蒋介石に電報で張学良の動静について報告し、注意を促している⁽⁹⁵⁾。国民党の実業部長などを務めた陳公博は、張学良と中国共産党との接触は当時、既にほぼ公然の秘密⁽⁹⁶⁾であったと述べている。張学良と中国共産党の接触を南京は知っていたというが、南京と中国共産党の接触を張学良も知っていたと述べている研究⁽⁹⁷⁾もある。しかし、これについては該当資料についての言及がなく、また、張学良関係の資料でも言及しているものがない。しかし、蒋介石が張学良の動きについて知っていたことは疑いない。なぜ、蒋介石が洛陽から西安に行って拘禁されたかについては、蒋介石の張学良に対する強い信頼があり、かつ関係情報が欠如していたことによるという説⁽⁹⁸⁾もあるが、強い信頼は妥当であるにしても、情報の欠如は妥当しない。『蘇俄在中国』に言及されているように、共産党との話し合いが「だいたいの合意」に至り、あとは蒋介石の「最終的な審査・指示を行うのを待つだけ」という状態が事実だとしたら、「最終的な審査・指示」が西安で行われるのは不自然ではない。蒋介石の洛陽・西安滞在中、陳立夫は何回か蒋介石の下を訪問している。蒋介石が自らの西安事変の日々を記した

『西安半月記』では、蒋介石は張学良の要求や話し合いを断固拒否したとしている。もちろん、周恩来についての言及はない。宋美齡の回想には周恩来と見られる人物が登場するが、蒋介石との話し合いは行っていない⁽⁹⁹⁾。しかし、蒋介石と共に監禁された陝西省政府主席の邵力子は、周恩来が張学良、楊虎城、蒋介石との話し合いに参加したと述べている⁽¹⁰⁰⁾。邵力子は1949年の国共内戦後は大陸に残った。蒋介石統治下の台湾で出た各種の回想記は『西安半月記』との整合性をとる必要があったが、大陸に残った邵力子の回想はその必要もなかったので、事実を書くことができたと思われる。話し合いは行われ、前述の12月26日の『解放新聞』の8項目要求受入報道となったのであろう。当時、南京総領事だった須磨弥吉郎は、西安事変について、次のように述べている。

1936年12月12日の西安事変即ち蒋介石が張学良に拘留せらるるの椿事発生せり。この夜、筆者は南京において『本事件は芝居なりと観測せらる』と報告したるが、支那の失地回復を実現せん為、抗日人民戦線を布かんとする芝居なりしこと、後に蔣の外人顧問たりし濠州系英人ドナルドの筆者への直話に依っても明なり⁽¹⁰¹⁾。

しかし、これはあくまでも須磨の回想であり、須磨が当時行なった報告はどのようなものだったかあきらかではない⁽¹⁰²⁾。

張学良は西安事変の後、蒋介石に付き添って南京に赴いたが、国民政府は12月29日、軍事委員会法に拠り張学良を上官に対する暴行脅迫の罪で、軍事委員会の組織する高等軍法会にかけた。判決は懲役10年、公民権剥奪5年の刑であったが、蒋介石の特赦要請により特赦令が出された。しかし、この特赦令には、拘束期限の明示なしの「軍事委員会の嚴重拘束の下に置く」という一文が付されていた⁽¹⁰³⁾。この拘束により張学良は1937年1月15日、浙江省奉化に赴き滞在した。そこを訪問した邵力子は2人で雑談していた際の張学良の言葉を書き留めている。

自分は、今回、命の危険を冒して、自ら蔣委員長を南京に送って来た。もともと自分は未だかつて上演されたことのないようなすばらしい劇を演じるつもりだった。蔣委員長が大政治家の度量を見せて、自分を西安に戻すようにしてくれていたら、この劇は永遠に語り継がれる美談になったのに！このすばらしい劇が最終的にだめになってしまったのは本当に残念だ⁽¹⁰⁴⁾。

邵力子は過ぎたことは後悔しても仕方がないと慰めている。しかし、この張学良の言及が事実だとしたら、少なくとも、張学良が蒋介石を南京に送って来た行為は張の考える「劇」であったのであろう。

6. 終わりに

西安事変が起こる前までに、蒋介石と中国共産党との話し合いは条件を詰めるところまで進んでいた。援助をめぐるソ連共産党との話し合いも進んでいた。張学良も中国共産党と交渉し、ソ連とも接触していた。両者の共通の認識は、次々に中国の領土を侵しつつある日本に対抗するた

めにはソ連の協力が必要であり、そのためには共産党を含めた統一戦線結成が必要であるということであった。既に先行研究が示すように、蒋介石が張学良に迫られて国共合作に踏み切ったというのは、事実ではない。当時の西安事変の新聞報道を見る限り、蒋介石と中国共産党との関係に触れたものはない。『解放日報』も中国共産党との関係については触れていない。張学良と楊虎城は8項目の要求を行なったが、それが主要紙である『中央日報』『大公報』『申報』で報道されることはなかった。通電をめぐって議論が起こることもなかった。報道されたのは救国の領袖である蒋介石を張学良と楊虎城が監禁しているということである。さらに12月16日の張学良討伐令の付帯として定められた討伐令に反するような宣伝、言論の禁止はさらに議論が起こる余地を無くさせた。西安事変は、蒋介石に抗日を迫る李宗仁、白崇禧らの西南派、頻繁に抗日を求めてデモを繰り返す学生達、次々に各地に結成されて抗日を迫る救国会、救国連合会を沈黙させた。蒋介石救出要請電報、中央支持電報がひっきりなしに飛び交うことになった。有力新聞3紙の中でも、『中央日報』は、中国の唯一の指導者・蒋介石を監禁している張学良を悪役として書きた。3紙とも中国各地のありとあらゆる人々が蒋介石の安否を気遣っている報道を行なった。上述の胡適の言葉のように「この現象はこの英雄不崇拜の民族において本当に得難い奇跡」という状態が出現したのである。そして、「蔣委員長はすでに全民族の領袖であったが、今回の蒙難はさらに全国民の民意を確かめることになった」のである。そして、この状態は、中央委員会宣伝部が行なった西安事変に先立つ2ヶ月前の蒋介石50歳の誕生日祝いを遥かに超えた蒋介石支持現象をもたらした。西安事変ほど領袖・蒋介石の重要さを人々に訴え、成功した宣伝はなかったであろう。西安事変は蒋介石に対する批判を封じ込め、中国の国論を中国の唯一の指導者・蒋介石支持にまとめ上げたのである。

(受理日 2016年10月16日)
(掲載許可日 2017年2月6日)

注 記

- ⁽¹⁾ 西安事変前の張学良と中国共産党の関係については、楊奎松(1995)『西安事変新探：張学良與中共關係之研究』台北：東大図書公司、劉維開(1994)「西安事変前張学良與中共的接触」『中国歴史学会史学集刊』第26期 pp. 147-162、蔣永敬(1995)『抗戰史論』台北：東大図書、などがある。中国共産党と国民党の関係については、楊奎松著(2008)『国民党的“連共”与“反共” = *Kuomintang: unity with communists and anti-communism*』北京：社会科学文献出版社、李敖(1987)「蒋介石與張学良1-3」『蒋介石研究五集』[台北?]: 李敖出版社、pp. 47-136、李坤(1987)「第二次国共合作形勢的歴史過程」『抗日民族統一戦線与第二次国共合作』北京：中国文史出版社、pp. 72-101、岡崎邦彦(2013)「西安事変前の中国共産党と蒋介石国民党一『反蔣』から『逼蔣』への転換と国共合作交渉の決裂」『東洋研究』188号、pp. 1-50などがある。また、交渉の際の共産党側の担当者の1人だった潘漢年の伝記にも交渉の様子が書かれている。潘漢年の伝記は、王朝柱(1993)『功臣与罪人：潘漢年の悲劇』香港：海天出版社、王凡(2011)『紅色特工：潘漢年傳』香港：三聯書店；香港浸會大学当代中国研究所、などがある。交渉関

連の手紙などを収録した関係資料集として、中共中央党史資料征集委員会編（1989）『第二次国共合作的形成』北京：中共党史資料出版社、重慶市政協文史資料研究委員会、中共重慶市委党校、紅岩革命記念館編（1992）『抗戦時期国共合作紀実』重慶：重慶出版社、中央档案馆（1997）『中国共産党關於西安事变档案史料選編』北京：中国档案出版社、などがある。

- (2) 徐彬如（1981）「中国西北特別支部与西北抗日救国会」中国社会科学院近代史研究所編『西安事变史料第2輯』北京：人民出版社、pp. 1-10の中の「關於『解放日報』等」p.8
- (3) 許正林著（2008）『中国新聞史 = History of journalism in China』上海：上海交通大学出版社、pp. 143-146「第4節 国民党政府報刊」に拠る。
- (4) 「新記」を冠した『大公報』に関する研究書として、吳廷俊著（1994）『新記<大公報>史稿』武漢：武漢出版社、がある。
- (5) 「西安事变時期的新聞与言論」前掲、『新記<大公報>史稿』pp. 251-261、「西安事变時高唱“国家中心”論」方漢奇主編；吳廷俊等著（2004）『<大公報>百年史』北京：中国人民大学出版社、pp. 239-244、参照。
- (6) 『大公報』1936年10月23日「蔣委員長飛抵西安、視察並西北剿匪軍事」。
- (7) 『上海日日新聞』1936年10月23日「蔣氏西安に飛ぶ」。
- (8) 『解放日報』1936年12月13日「張楊發表対時局宣言、八項主張要求全国採納、蔣委員長在兵諫保護中、但安全問題可保無虞」。訳は筆者による。以後、断りのない限り訳は筆者によるものとする。
- (9) 12月14日の『大公報』『中央日報』『申報』は、呼びかけ人として張、楊とともに名を連ねた上述の高級軍人たちについては、いずれも脅迫による捏造でなされたとしている。『大公報』1936年12月14日「張学良通電、列名頭爲脅迫冒捏」、『中央日報』1936年12月14日「西安城上發言紅旗並在城外趕築工事、張通電列名諸人之分析」、『申報』1936年12月14日「張学良通電列名人乖謬」。
- (10) 『中央日報』1936年12月13日「張学良竟率部叛変！国府下令褫職嚴辦」、『大公報』1936年12月13日「張学良竟率部叛変、蔣委員長被留西安、中央緊急會議今晨始散、国府下令張免職嚴辦、行政院長由孔祥熙代理」、『申報』1936年12月13日「西安昨發生重大事变、張学良所統率部隊突然異（ママ）動、中央各領袖深夜開緊急會議、国府命令張学良褫職嚴辦」。
- (11) 『中央日報』1936年12月13日「昨日西安之叛変」。
- (12) 「社説」の名称として、『大公報』『中央日報』は「社評」、『申報』は「時評」を使っている。
- (13) 満州事变の際に不抵抗だったことを指すと思われる。張学良は「不抵抗將軍」と呼ばれた。
- (14) 『中央日報』1936年12月14日「時局之定力」。
- (15) 1936年末、日本の後援をうけた内蒙古軍が綏遠省に進出し、同省主席の傅作義軍と戦う綏遠事件が起きた。両軍は百霊廟をめぐる戦ったが傅作義軍が百霊廟を占拠し、内蒙古軍を退けた。この勝利は日本に対する中国の勝利ととらえられ、中国側の自信を強める結果となった。
- (16) 『大公報』1936年12月14日「西安事变之善後」。
- (17) 1936年7月のスペインでの人民戦線政府と軍部との内戦。1939年3月まで続いた。
- (18) 『申報』1936年12月14日「中国還是整個的中国」。
- (19) 『大公報』1936年12月14日「各地軍政長官一致擁護中央」、『中央日報』1936年12月14日「各省長官聽命中央」。
- (20) 『大公報』1936年12月14日、前掲「各地軍政長官一致擁護中央」の記事中にあり。

-
- (21) 『大公報』1936年12月15日「李宗仁等、擁護中央」。
- (22) 『中央日報』1936年12月15日「劉湘返蓉、對西安事異常憤慨、決即通電聲請討張」。
- (23) 『中央日報』1936年12月14日「馮昨電張懇切規勸」。
- (24) この人数については異同がある。『申報』は170余人としている。『申報』12月15日「全国青年将領胡宗南、黄傑、李默庵。孫元良等170余人函電声討張学良」。
- (25) 『中央日報』1936年12月15日「全国青年将領連名、電箴張学良」。
- (26) 『中央日報』1936年12月15日「宋哲元等電張箴勸」。
- (27) 『解放日報』1936年12月14日「全国一致主張抗日、各方派遣代表來陝」。
- (28) 『解放日報』1936年12月15日「(論評) 抗日連軍、臨時西北軍事委員會成立」。
- (29) 『中央日報』1936年12月15日「各地將領声請討張」。
- (30) 『大公報』1936年12月15日「全国將領一致請纓」。
- (31) 『大公報』1936年12月15日「各地憤慨紛起声討」。『中央日報』1936年12月15日「擁護中央既定國策、各地党部团体一致主張并請中央明令討逆」。
- (32) 『中央日報』1936年12月16日「全国將領電呈中央、請頒明令討張」、『大公報』1936年12月16日「各將領請纓促下討伐令」。
- (33) 中国国民党中央委員會党史委員會[編](1983)『革命文獻 第94輯：西安事變史料(上)』台北：中央文物供應社、p. 312
- (34) いずれも12月17日。『中央日報』「国府昨頒明討逆、何応欽膺討逆總司令、于右任被宣慰西北、叛軍攻擊華県、国軍發生戰事」、『大公報』「国府昨下討伐令、大軍已冒雨征西、何応欽討逆總司令、于右任宣撫西北軍民、華県付近發生激戰」、『申報』「国府下令討伐張学良、特派何応欽為討逆總司令、端納電告張無傷害蔣氏意、劉峙電張学良作最後箴告」。
- (35) 『中央日報』1936年12月17日「討逆—我們的十字軍」。
- (36) 『大公報』1936年12月17日「討伐令下之後」。
- (37) 『大公報』1936年12月18日「時局短信」。
- (38) 同上
- (39) 『中央日報』1936年12月19日「回民為蔣公祈祷安全、今日在新疆同鄉会恭誦天經」、『大公報』1936年12月20日「濟南回教同胞、為蔣委員長祈祷」。
- (40) 『大公報』1936年12月19日。「時局短訊」
- (41) 『中央日報』1936年12月19日「班禪在玉樹為委座祈祷」。
- (42) 『大公報』1936年12月24日「僧衆祈祷在雍和宮」。
- (43) 『中央日報』1936年12月18日「漢口5千童軍電質張学良」。
- (44) 『中央日報』1936年12月18日「海外僑胞對張逆極憤慨、紛電中央請即討伐」「顧維鈞、郭泰祺、電促張逆悔悟」。
- (45) 『申報』12月21日「紹興 各界組織赴難團」。
- (46) 『中央日報』1936年12月19日「首都十余万公民、組織救国赴難团、追隨中央大軍入閩、營救蔣委員長出陝」。
- (47) 『大公報』1936年12月21日「京童子軍、組赴難团、往迎蔣會長返京」。
- (48) 蔣介石は、全国童子軍の會長を務めていた。

-
- (49) 『大公報』1936年12月23日「雲南省耆老200余人、欲北上營救蔣委員長」。
- (50) 『中央日報』1936年12月23日「各地民衆組織赴難団、將入陝奉迎領袖、與張逆不共戴天」。
- (51) 『中央日報』1936年12月25日「各界赴難団、先後出發赴陝」。
- (52) 『大公報』1936年12月20日「首都百万市民、明日舉行宣誓、誓死效忠党国、擁護蔣委員長」。
- (53) 『中央日報』1936年12月22日「陸軍大学全体教職學員、宣誓効忠党国」。
- (54) 『中央日報』1936年12月25日「各地討逆会、誓除叛逆」「湯山各界民衆舉行討逆大会、宣誓効忠党国擁護蔣委員長」、『大公報』1936年12月25日「上海各界開会、擁護中央討逆、全体皆宣誓効忠党国、組迎蔣委員長代表团」。
- (55) 『中央日報』1936年12月22日「中央電台廣播節目、側重時事要聞、喚起全国国民討逆殺賊、音樂節目改播愛国歌曲」。
- (56) 『中央日報』1936年12月23日「蔣委員長蒙難西安、京市停止娛樂宴会、各戲院昨日起停業三天」。
- (57) 『中央日報』1936年12月20日「本京五大学女生、室内運動表演延期、因在戒嚴期禁止一切集会、獲憲兵司令部通知臨時停止」。
- (58) 『大公報』1936年12月21日、胡適「張学良的叛国」。
- (59) 『解放日報』1936年12月26日「精誠所至金石為開、蔣委員長接受救国主張」。
- (60) 『申報』1936年12月26日「蔣委員長昨安返洛陽、偕宋子文宋美齡等飛機同抵洛、定今晨由洛起飛返京主持大計前線各軍已奉令休戰停止前進」。
- (61) 『中央日報』1936年12月26日「蔣委員長、今日旋京」。
- (62) 『中央日報』1936年12月26日「狂歡中幾句話」。
- (63) 『中央日報』1936年12月19日「張学良与張学狼」。
- (64) 『大公報』1936年12月23日「中国不做西班牙」。
- (65) 『大公報』1936年12月26日「南京聞喜報頓成長不夜城」「喜報乍伝歡声雷同、举国同慶爆竹齋鳴、各地定今日懸旗慶賀」など。
- (66) 『大公報』1936年12月27日「民衆慶祝領袖安全、欣喜情緒充溢全国、各地懸旗結彩提灯遊行、塞外辺関亦皆熱烈祝賀」。
- (67) 『中央日報』1936年12月27日「蔣委員長、抵京詳情」中の数字。なお、『中央日報』1936年12月26日には「蔣委員長安抵洛陽 百万市民同声歡呼」という見出しがあるので、100万人のうち40万余人が参加したということになるのか。
- (68) 同上記事。
- (69) 『大公報』1936年12月27日「歡賀、蔣委員長出險！由国曆28起、真実大減価！」。
- (70) 『中央日報』1936年12月27日、広告欄、首都大劇場、国民大劇場、大華大劇場、世界大劇場、新都劇場。
- (71) 『中央日報』1936年12月28日「慶祝副主席回京、中枢昨日舉行盛会、林主席最望服從中央並在蔣領導下努力猛進」。
- (72) 『中央日報』1936年12月27日「首都各界今晨舉行、慶祝委座回京大会、上午九時在明故宫飛機場、籌備会請委員長蒞会致訓」。なお、見出しは「9時」とあるが、記事中はすべて「8時半」となっている。
- (73) 『中央日報』1936年12月28日「首都百万民衆、昨慶祝蔣委員長回、馬市長代表致歡迎詞、何部長代表委座致謝罪、会后遊行全市情況熱烈」。
- (74) 『中央日報』1936年10月29日「標語口号」。

-
- (75) 『中央日報』1936年10月25日「蔣公五十寿辰記念歌」。作詞者は何志浩（1905年～2007年）「中華民國陸軍軍歌」の作詞者である。
- (76) 董顯光（1952）『蔣總統傳』台北：中華文化出版事業委員會、1952、264頁。
- (77) United States Department of State/*Foreign relations of the United States diplomatic papers, 1936. The Far East (1936) The Far Eastern crisis*, p. 362 (Document No. 793. 94/8290)
- (78) 同上、p. 364 (Document No. 793. 94/8295)
- (79) 「西安会議の内容、四項目を決定す」同上、1936年10月31日。
- (80) The China Weekly Review Nov.7, 1936 *Chiang Kai-shek Meets Soviet Representatives in Sian?* この秘密軍事協定についての記事は、『上海日日新聞』1936年10月30日中国語版に「国府與共軍締結軍事協定」の見出しで掲載されている。
- (81) 蔣中正（1957）『蘇俄在中國：中國與俄共三十年經歷紀要』台北：中央文物供應社、p.74.
- (82) edited and compiled, with an introduction and notes by Sidney H. Chang and Ramon H. Myers (c1994) *The storm clouds clear over China: the memoir of Chen Li-fu, 1900-1993*, Stanford: Hoover Press, p.120, なお本書には中国語版『成敗之鑑』もあるが、英文版が先行出版なので英文版を参照した。
- (83) Министерство иностранных дел СССР (1973) *Документы внешней политики СССР том 18*, Москва : Изд-во полит. лит-ры, p.537 (Document No. 389) 参照。
- (84) 下線は原文に付されている。
- (85) [составители А.М. Ледовский, Р.А. Мировицкая, В.С. Мясников ; ответственный редактор С.Л. Тихвинский] (2010) *Русско-китайские отношения в XX веке“: том 3 1931-1937*, Москва: Памятники исторической мысли, p. 582 (Document No. 354)
- (86) 同上、p.481 (Document No. 312)
- (87) これについては前掲、『第二次国共合作的形成』が詳しい。
- (88) 前掲、*Русско-китайские отношения в XX веке“: том 3 1931-1937*, p. 350 (Document No. 232).
- (89) 同上、pp. 469-470 (Document No.307).
- (90) ロシア語では「張学良の秘書イン・チャンシン」と表記されているが、「応徳田」のこと。応徳田著；岳龍、王秦整理（1980）『張学良与西安事变』北京：中華書局1980、p. 28に、李杜と共にソ連大使館を何回か訪問したと言う記述がある。また、張学良が応に「路天行」と名乗るように勧めている記述もある（同書p. 27）。ソ連大使館では「応天行（イン・チャンシン）」と称したようである。
- (91) 前掲、*Русско-китайские отношения в XX веке“: том 3 1931-1937*, 2010、p. 474 (Document No. 309)
- (92) 同上、p. 484-485 (Document No. 314)
- (93) 前掲、劉維開「西安事变前張学良與中共的接触」p. 156-157にこの言及がある。劉維開は資料として「戴笠呈蔣委員長報告、民国25年3月13日、特交档案分類資料、特件—政治」と挙げている。
- (94) 前掲、『革命文獻 94集：西安事变史料（上冊）』p. 55。
- (95) 前掲、『革命文獻 94集：西安事变史料（上冊）』「9月20日電」pp. 57-58、「9月24日電」p. 61、「9月26日電」p. 62。
- (96) 例えば、陳公博は自らの回想録『苦笑録』の「西安事变」の項で「東北軍に早くから不穏な動きがあるというのは、ほぼ公然の秘密になっていた。私も早くからそれを知っていた」（陳公博著、李鏗等編注（1979）『苦笑録：陳公博回憶 1925至1936』香港：香港大学亞洲研究中心、p. 360）と述べ、国民党の

銭公来とその実態について話している。日本の新聞も「討共工作に従いつつある張学良旗下の旧東北軍は、共産軍のために、苦戦疲弊して、最近ひそかに妥協停戦を策しつつあると伝えられる」（『報知新聞』1936年10月13日「共産党の指導下に躍る支那の抗日人民戦線」）などと報じていた。

- ⁽⁹⁷⁾ 前掲、楊奎松『国民党的“連共”与“反共” = Kuomintang: unity with communists and anti-communism』。楊奎松は「彼（張学良）が陝西の紅軍とちょうど交渉を始め、妥協の方法を探っていた時に、南京方面でもまた中国共産党と交渉するために人を派遣していることを思いがけなくも知り、紅軍と妥協する決心が当然のことながらさらに強まった」（p. 326）と記している。
- ⁽⁹⁸⁾ 蘇燈基（1999）「蔣中正何以身入虎穴？」『張学良・共産党・西安事変』台北：遠流出版、pp. 51-75。
- ⁽⁹⁹⁾ 宋美齡回想中の「西安の組織の中の有力者」が周恩来であるというのは現在ほぼ定説であるが、同回想中では「西安の組織の中の有力者」は蒋介石には会っていない。宋美齡「西安事変回憶録」前掲『革命文獻 94集：西安事変史料（上冊）』pp. 26-51。言及該当箇所はp. 45。
- ⁽¹⁰⁰⁾ 邵力子（1986）「西安事変追憶」呉福章編『西安事変親歴記』北京：中国文史出版社、p. 192
- ⁽¹⁰¹⁾ 須磨弥吉郎[著]；須磨未千秋編（1988）『須磨弥吉郎外交秘録』大阪：創元社、pp. 81-82。
- ⁽¹⁰²⁾ 外務省関係の資料をさがしたが見つけることができなかった。
- ⁽¹⁰³⁾ 「一. 政府対張学良之懲処」前掲、『革命文獻 95集：西安事変史料（下冊）』pp. 109-124。
- ⁽¹⁰⁴⁾ 前掲、邵力子「西安事変追憶」p. 193。

参考文献

- [外務省情報部]（1938）『中国共産党年史 1937年』外務省情報部、この資料は次の形で再発行されている。
- 波多野乾一編（1961）『資料集成中国共産党史 第7巻：1937年』時事通信社
- Clubb, O. Edmund（1971）. *China & Russia: the "great game"* New York: Columbia University Press.
- ヴェ・エヌ・ニキーフォロフ、他（1978）「中国における民族統一戦線の結成」『極東の諸問題』7巻1号pp. 129-151
- Титов, А. С.（1981）*Борьба за единый национальный фронт в Китае, 1935-1937 гг.* Москва: Наука
- 井上久士（1986）「国民政府と抗日民族統一戦線の形成—第二次国共合作論への視角」『中国国民政府史の研究』汲古書院 pp. 317-341
- Taylor, Jay（2009）*The Generalissima: Chiang Kai-shek and the struggle for modern China.* Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press.
- 罗朋（2001）「西安事変中媒体比較」『四川教育学报』第17巻5期 pp. 48-51